

詩人の周辺

小海永二



教育出版

詩人の周辺

小海永二

教育出版

著者略歴

小 海 永 二 (こかい えいじ)

1931年(昭和6年)11月 東京生まれ

東京大学文学部仏文科卒

現在、横浜国立大学教授

日本文芸家協会会員

日本現代詩人会会員

詩人の周辺

1983年10月1日 初版第1刷発行

定価 2,300 円

著 者 小 海 永 二

発 行 者 武 川 潤 平

発 行 所 教 育 出 版 株 式 有 限 公 司

〒101 東京都千代田区神田神保町2-10

電話(03)261-0191 振替東京9-107340

©E. Kokai 1983

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

印刷 西田整版

製本 国 宝 社

ISBN4-316-35320-9

詩人の周辺
目次

I

詩人小論——三好達治・丸山薫・伊藤整・津村信夫 9

わが亀之助 19

ロマネスクな詩美・安西冬衛 27

堀口大学先生のこと 40

心平さんのこと 43

原民喜の詩 47

「戦後詩」から「現代詩」へ——その多彩なる旗手たち—— 53

私的体験と自然美と夢の記述と——清岡さんの詩について—— 64

黒田三郎氏を悼む 75

作品鑑賞 78

黒田三郎「僕はまるでちがつて」 73

中桐雅夫「やせた心」 82

自作自註―詩「水上」― 87

II

わが偏書記 93

1 アジア文学への関心 93

2 埋もれた二冊の名訳詩集 97

3 太平洋戦争中の二冊の本―思想の流行のうさんくささ― 102

4 無視されているモダニズム文学 106

5 伊藤桂一の時代小説―人間へのいとおしみ― 110

読書雑感

114

草野心平『ばあばらぶう』

114

飯島耕一『海への時間』・『塔と蒼空』——自由な精神の発動——

116

M・サヌイエ『パリのメダ』——実証的な優れた運動史——

122

宇佐見英治『三つの言葉』——知的な内省的省察の輝き——

124

詩人会議編『詩と資料・詩人会議の20年』

126

黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』

129

アンソロジーの勧め

134

「世界文学」への一道程——『ラテン・アメリカ文学叢書』刊行に寄せて——

138

一冊の本『ぼくたちの未来のために』

141

『原民喜——詩人の死』出版まで

143

書きたいテーマ・出したい本

148

Ⅲ

フランス・詩の旅 153

日曜随想 181

ヒツジ歳、詩の“輸出”、趣味を聞かれて、
葛の葉、
クルマ中毒、詩人と翻訳、私のおしゃれ

辞典の誤り 196

広島の訴え 205

アンリ・ミシヨールの絵画 212

墨彩の詩人・大内香峰 224

折り折りに 235

ミシヨールとロルカ 235

資料『現代の詩』のこと

237

原民喜展に寄せて

239

短歌とわたし

240

教科書とわたし

242

表現を氣にするくせ

245

あとがき

248

初出一覧

250

主要著訳書一覧

253

詩人小論——三好達治・丸山薫・伊藤整・津村信夫

三好達治（一九〇〇—一九六四）

昭和二年の末近く、当時東大仏文科の学生だった三好達治は、東京馬込の萩原朔太郎宅で朔太郎の末妹アイ（本名愛子、別名周子^{かねこ}）に会う。このアイとの出会いは、達治にとってまさに運命的なものと言つてよかつた。達治の半生にわたる恋がここに始まる。達治は結婚を望んだが、定職もなく将来の保証もない貧乏書生との結婚を誇り高い朔太郎の母ケイが許すはずがない。達治は翌年大学を卒業すると、アイとの結婚の前提条件として、ケイのすすめでアルス社に就職するが、同社の営業不振のため二ヵ月ほどで退社、遂に結婚も断念する。この間、アイ自身にも達治の愛に応えようとする気持ちはほとんどなかった。

その後、達治は筆一本の生活に入り、米塩の資を得るためフランス文学の翻訳に専念しながら、昭和五年に処女詩集『測量船』を出版、次いで昭和七年に『南窗集』^{なんそう}、同九年に『聞花集』^{かんか}

を刊行し、次第に文名を高めてゆく。昭和九年一月には佐藤春夫の姪智恵子と結婚し、同年末には長男達夫を得た。

一方、萩原アイは昭和八年十一月、朔太郎の詩友佐藤惣之助の許に嫁し、達治とアイとの愛のえにしはまったく絶たれたかに見える。ところが、昭和十七年の五月十一日に急性肺炎で朔太郎が死去し、それから四日後の十五日に、思いがけず惣之助が突然脳溢血で急死すると、惣之助との間に子なく、ひとりになったアイに向かって、達治の恋の情熱が十数年の歳月を隔ててふたたび激しく燃え上がる。

すでに妻智恵子との間がうまく行かなくなっていた達治は、昭和十九年五月妻子と離別し、正式にアイと結婚した上で、それより二カ月前から移っていた福井県三国の住居にアイを迎えて新しい生活に入った。この時達治四十四歳、アイ四十歳。だが、苦勞らしい苦勞をしたことのないお嬢さん育ちのアイと気性の激しく癪癪なところのある達治との間が、しかも戦時下の万事不如意な生活の中で、長く続くはずがない。このようやく成就した達治の恋は、早くも翌年二月には破局が来、アイは達治のもとを去る。

以上が達治の半生かけた恋のあらましだが、この恋の経緯が、幼少年期の体験とともに、詩人の詩業に与えている影響は、必ずしも小さくない。とりわけ、詩人が三国在住中に出版された詩集『花筐』(昭和十九年)中の諸作は、いずれも達治がアイとの新しい生活に入る直前の時期に書かれたもので、『花筐』一卷は、いわば達治のアイに捧げた愛の詩集とも言える。

艸くさのまにあるは木のまに
かがよへる花のあはれを
わが嘆ずころのひまに
すみたまふひとはたれびと

〔艸のまに〕

そのつもりで読むと、この詩集の背後には、あらわにはないが、ひとりの女人にょじんの影がにおいやかに立っているのが、それと看取される。

なお、右の恋のいきさつは朔太郎の娘葉子が達治の死後書いた小説『天上の花——三好達治抄——』にくわしい。『天上の花』は小説で、そこには当然虚構が含まれてはいるが、二人の関係がおおよそどのようなであったかを知るには十分であろう。

丸山 薫（一八九九—一九七四）

丸山薫は昭和十年代の詩壇の主流をなした『四季』派の代表的詩人のひとりであって、その交友も『四季』派の詩人たちと親密だったが、三好達治、立原道造、津村信夫といった同派の詩人たちの詩風とくらべると、そこには明瞭に異なる一点が見出されるように思われる。

すなわち、薫の詩も広く言って抒情詩の範疇に入ることには確かだが、詠嘆的な抒情よりはむしろ絵画的な心象の方に、人生の悲傷、哀傷よりは郷愁に満ちた浪漫的な物語世界の方に、傾

斜しており、そこに『四季』派の詩人たちの中で薫の占める独自の位置があったと言える。三高時代のクラスメートで、薫の刺激によって詩に近づいたと自ら語る三好達治は、薫をファンテジストと呼んでおり、これは詩人の資質を知る親しい友の正しい指摘と言うべきだが、詩人自らもこうした傾向を自覚し、第五詩集『物象詩集』（昭和十六年）の「自序」の中で、次のように記している。

へこの集成を編むに当つて、私は自分の作品に一貫して流れてゐる一つのつよい傾向を看取することが出来る。それは物象への或るもどかしい追求欲とそれへの郷愁の情緒である。それこそ私に詩を書かせる動機となり、また自分の詩をそれらしく特色づけてゐるものだらう。私と雖も抒情詩が古来伝統するところの、自然へのあはれや人の世の涙につながるころ意気を排すものではない。実はといへば、私自身の常住はそれによつて揺り動かされてはゐる。しかも詩を企てるとき、心にたたみかかつてくるものは物象の放射するあの不思議な陰翳である。』

こうした物象への郷愁と並んで、詩人の内には生涯にわたって海洋への憧れが住んでいた。詩人の全作品中、海を題材にしたもの、もしくはそれから連想されたものの占める割合は、かなり大きい。

船長がラム酒を飲んでゐる。

飲みながらなにか唄つてゐる。

唄は囁^{ささ}れてゆつくり滑車が帆索^{つな}に回るやうに哀しい

鷗が羽根音をひそめて鱸^もの薄闇を囁いて行つた。

聴^きて、河口に月が昇るのだらう。

船長の胸も赤いラム酒の満潮になつた。

その流れの底に

今宵も入墨の錨が青くゆらいでゐる。

(錨)

詩人の海洋への(また船への)憧れはすでに少年時代から始まっていたが、やがてその憧れが嵩じて、中学卒業後、東京高等商船学校に入学し、将来の進路を海上での生活に定める。ところが、一年ほどで病いを得て、同校退学のやむなきに至り、ここに海洋への望みを絶たれたことが、詩人の脳裡に、海と船にかかわるイメージを鮮烈に結像させることになった。

詩人が多年の夢を満たして実際に船に乗ることができたのは、それから二十年余を経た昭和十六年のことである。第七詩集『点鐘鳴るところ』(昭和十八年)は、この時詩人が練習船海王丸に便乗して貿易風帯を帆走した体験に基づいて成った。丸山薫の詩業の成果は、もとより海洋詩篇に限られるものではないが、そこに彼の詩業の一特色を見ることが可能であらう。ちな

みに、処女詩集（昭和七年）は『帆・ランブ・鵬』と題されて詩人の憧れの対象を明示しており、第十三詩集『連れ去られた海』は、それまでに書かれた海洋詩篇の集成詩集にはかならない。

伊藤 整（一九〇五—一九六九）

昭和二十年代後半の文壇で人気作家のひとりとなりブームを創った作家伊藤整は、初めひそやかにつましい抒情詩人として文学的出発をした。その残した膨大な量の小説・評論・エッセー・研究・翻訳にくらべて、『雪明りの路』（大正十五年）『冬夜』（昭和十二年）の二詩集、全部で百四十篇余りの詩は、あまりに少ないと言えは言えるが、それらの詩作品は、この作家を、昭和初期のすぐれた抒情詩人のひとりとして詩史に位置づけ得るだけの文学的価値を有している。しかしながら、この作家は、中野重治が小説に転じて後ほとんど詩を書くことがなかったという点でまったく同じ経歴を持ちながら詩人としても高く評価されているのにくらべると、詩人として見られることが一般に少なかった。それは、この作家の詩作品のほとんどが、郷里北海道小樽に在住中の、十五、六歳から二十二、三歳にかけての少青年期に書かれ、昭和三年上京後は、もっぱら小説や評論に力を注いで、詩壇的に目立つ活動がなかったことに、主として原因するだろう。

へ昭和三年の春、私は前年からそこに学籍を持つてゐた東京商科大学に学ぶために上京した。その頃は、思想的にはアナキズムやマルキシズムが盛になり、文学形式の上では新感